

「183 そして 240」人間社会学部の軌跡・奇跡

実践女子大学副学長(創設時:人間社会学科主任) 飯田 良明

私の実践女子大学との邂逅は、2003年2月17日(月)、澤井勇理事長・飯塚幸子学長と実践女子学園高等学校の応接室での面談であった。そこで学園創立100周年を記念して開設する人間社会学部人間社会学科構想を拝聴し、同時に大学運営について私見を求められた。その後人間社会学科教授就任を要請されたが、躊躇していたところ、人間社会学科構築で中心的役割を果たし、自らも教授就任予定の知友壘昭吉先生から強く就任を要請され、私は移籍を決断した。

あれから10余年を経過したが、人間社会学部は2004年人間社会学科1学科183名(定員100名)の新入生でスタートし、学部長として2011年の現代社会学科新設に参画し、2014年の新入生は2学科で240名(定員200名)を迎えるまでに成長した。人間社会学部のこの11年間の軌跡は、18歳人口減少で学生確保に喘ぐ大学が多い中でまさに奇跡と云ってよいであろう。特に1学科時代の7年間のもとより、2学科体制になってからの4年間も常に定員を大幅に上回る新入生を迎えられたことは奇跡に近いと私は考えている。余談だが、学園財政にも大いに貢献しているはずである。

しかし、人間社会学部は当時の実践女子大学とは異質の教育システムでスタートしたのであった。すなわち、セメスター制(半期制)、CAP制、成績評価をABCと同時にGPA(4点制)で示す等々である。したがって、キャンパス内に2大学並存の観であったが、こうした教育システムはやがて全学的に採用されることになった。さらに人間社会学部は1年次から4年次まで演習を必修とし、学生の思考力・人間力向上に資する教育方法を取り入れると同時に1泊2日の新入生セミナーも学部発足時から始め、学生同士、学生と教員間のコミュニケーションの活性化を促す「学びの共同体」を目指した。こうした意欲的な教育実践が人間社会学部の発展・成長に大きく繋がっていると確信している。

とりわけ、本学人間社会学部の最大の特長は、社会学や心理学を学ぶと同時に経済・経営系の学問を学べる点にある。数ある人間社会学部の中でも本学部のようなカリキュラム構成の人間社会学部は皆無に近い。そこで人間社会学部のモットー「人を知り、社会を知り、ビジネスを学ぶ」が自然に定着していった。このモットーは人間社会学部の性格を如何なく言いあらわしている。

人間社会学部は現状に甘んずることなく、2017年度から新たな改革に挑戦することになっている。人間社会学部が今後も自己改革の精神を忘れず、成長・発展し続けることを願わずにはおれない。卒業生とともに人間社会学部10周年を祝いたい。